



子どもの貧困と子ども支援

徳丸 ゆき子 さん

（大阪子どもの貧困アクショングループ シーパオ NPO 法人CPAO代表）

人権保育専門講座3は、「大阪子どもの貧困アクショングループCPAO（シーパオ）」代表の徳丸ゆき子さんに、「子どもの貧困と子ども支援」をテーマにご講演いただきました。桑名・志摩・伊賀の3会場に、県内各地より54名の方にご参加いただきました。

子どもたちが直面している貧困問題は、社会にある様々な支援からもれ落ちてしまうおとなの貧困問題でもあり、社会全体で捉えるべき問題なのではないかと訴えかけられました。参加者一人ひとりが、目の前の地域・保護者へのかかわりについて、じっくり自分自身のことをふり返る機会となりました。

1. 大阪子どもの貧困アクショングループ シーパオ CPAOについて



大阪子どもの貧困
アクショングループ
CPAO Child Poverty Action Osaka

私たちの団体は、「大阪子どもの貧困アクショングループ」といいます。活動をはじめた2013年当時は、まだまだ子どもの貧困問題については論じ始められたばかりでしたが、この問題を重く受けとめ、社会にぜひ発信したいという思いで、タイトルに「貧困」の文字を入れました。しかし活動をすすめていくうちに、改めて当事者に貧困であることを思い知らせる必要もないですし、地域の方たちが集まりやすい場所にするにはどうすればいいのかと考えました。もともと「Child Poverty Action Osaka」という名称もつけていたので、この頭文字をとって、CPAO（シーパオ）としました。また、「子ども（Children）」を「包む（PAO）」活動にしたいという願いも込められています。子どもたちがいつでも気軽に来られる、「“おうち”みたいな場所をつくりたい」という思いで取り組んでいます。

2. 「貧困の入り口」

私たちのように子どもの貧困にかかわる団体では、保育園のような就学前施設のことを「貧困の入り口」と称して注目しています。なぜ注目するのかというと、支援の必要な子どもに対して、親子共にかかわることができるからです。通常小・中・高校と年齢が上がっていくにつれ、親に会える機会は少なくなってしまいがちです。しかし保育園では、朝と夕方、送迎のタイミングで毎日確実に親と接触できます。このことが保育園等の強みであると考えます。保育園からは「ネグレクト傾向のある親をCPAOに一度お連れしたいのですが…」と、私たちの活動につないでくださるケースもよくあります。でも、小学校から中学校、高校と年齢が大きくなるにつれて、そのようなケースはぐっと少なくなります。

学校からの働きかけで私たちと親子がつながることができたということは、まず少ないのが現状です。しかし、今一番危惧されることは、保育園に行けていない子どもたちのことです。次のようなケースがありました。

小学校6年生の男の子がいます。その子は不登校が続いており、1年生のころからずっと登校していません。訪問をとおして親とつながりがもてたので、その後も家庭訪問に向いてはその子と話をするようになりました。すると、「本当は（学校に）行きたい」と話してくれました。なぜ学校に行かないのかと聞くと、「2歳と4歳のきょうだいの面倒をみているから」という返事が返ってきました。親からは、「保育園に入れると保育料もかかるから、兄ちゃんが面倒をみておけ」と言われるのだそうです。それで、そのきょうだいは小学校にも保育園にも行くことができず、小学校6年生の兄が下のきょうだいの面倒を家でみえています。でも、学校の先生には黙っていてほしいと言うのです。そして、親にも直接話してほしいと言います。『学校に行きたい』なんて言ったら、また陰で何をされるかわからない』からだそうです。

行政機関に相談するにも、はっきりした証拠がないとなかなか対応してもらうのが難しいようです。今後この子たちにどうかかわっていくのか、現在頭を悩ませている課題の一つです。こうしたケースからも言えることは、特に保育園や学校に行くことができない子への対応について、学校や保育園と共に考える必要があるということです。

3. 私の活動背景

～学校に行けなかった私～

では、なぜ私が子どもにかかわる仕事を続けているかということ、実は私自身が“しんどい子ども”だったからです。学校に行けませんでした。いわゆる不登校児童です。保育園には通ったのですが、そこからつまづきました。保育園に入るまでは母と二人でのびのびと過ごしていたものが、入った途端に「あれします」「これします」と、やることを決められるのです。先生の指示についていけない自分がありました。お遊戯も苦手でしたし、「みんなと一緒にするのは嫌だな」と思っていました。でも、おとなからは「（みんなと一緒に）やります！」とやらされ、私は次第に「保育園きらい」、「行きたくない」と親に言うようになっていきました。

小学校、中学校と進むにつれ、「行きたくない」というよりは、「合わない」と感じるようになっていきました。それは、学校というところが、どこかみんなと一緒に活動することを強制しているように感じられたからです。「同じようにしなさい」「なぜ普通にできないのですか」と。私が住んでいたところは下町風情あふれるところでした。近所のおっちゃんやおばちゃんにはおせっかいな方が多くて、学校にも行かず毎日家にいる私を放っておかなかったんです。中学生くらいになるとそっとしておいてほしいんですけど、おそらく私の親もご近所に相談していたのでしょう、家に一人でいると、ピンポンって呼び鈴が鳴りました。「犬の散歩行くでえ！」と誘いに來てくれるのです。「うっとうしいわ！」



と思いながらも散歩に付き合おうと、おばちゃんたちは何にも言わないんですね。「なんで学校に行かへんの？」とか「ちゃんと学校行きや！」とか、そんなお説教は一切しないんです。何も言わずに外に連れ出して、ただおやつをくれたりするだけなんです。それが、よけい心に沁みてきて、「おばちゃんたち私の状況知ってるはずなのに、何も言わんとやさしいな…」とっていました。

また当時、塾には通っていました。それは、親友が通っていたので、学校で会えない代わりに、塾で会うためでした。週1回分の月謝しか払っていなかったのですが、親友に会いたくてほぼ毎日行っていました。塾のオーナーも、「月謝が足りない」等何も言わなかったですね。嫌な顔ひとつしませんでした。そしてその塾の講師（当時は大学生のアルバイト）が、次のようなことを話してくれました。「勉強というのは、大事なことだと思う。でも、どこでもできる。大学に行くこと自体は、別に大したことではないけれど、基礎学力というのは身につけておいた方がいいよ。この先何か“やりたい”って気持ちになったときに、やり直しがききやすいから」というものでした。そのようなことは当時誰も教えてくれませんでした。“学校に行くことが正しい”としか周りからは聞いていないなかで、「そうか、勉強はどこでもできるんだ」と思いました。また、その先生が私のことを褒めてくれるものだから、私は一生懸命勉強してどんどん成績が良くなっていきました。気がつけば、学校にあまり行っていないにもかかわらず成績がよく、親も先生も、私が学校に行かないことに対して特に何も言わなくなりました。時々学校に行ってテストを受けて、そしてなんとか卒業できました。だから、いまの私があるのは、これまでいろいろな人の支えがあったからだと思っています。それで、おとなになってどんな仕事に就こうかと思ったときに、「自分に何ができるのだろうか」と一生懸命考えました。「自分のようにしんどい子どもは周りにたくさんいるのだろうか、そんな子どもたちのためだったら、もしかしたら何かできるかもしれない…」そうしてはや22年、子どもに関係する仕事を続けています。

～これまで取り組んできた課題～

CPAOを立ち上げる前は、「国際協力NGOのセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」で仕事をしていました。途上国の支援をする団体ですが、私が入った2002年は国内事業が始まった年でした。私はそこで10年間勤めたのですが、仕事内容のテーマはいろいろと変わりました。そのなかで、2009年からは「子どもの貧困」にかかわっていきました。2008年、アメリカではリーマンショックという金融危機がおき、ワシントンでもかなりの路上生活者が出ました。家を失くしテントで暮らす子どもたちの様子が報道されたりしました。日本にも不況の波は押し寄せ、リストラが断行されるなか中高年の自殺率が上がったり、親の収入減によって社会保険料が払えず、病気やけがをした子どもたちが病院に行けなかったりという事案が新聞報道等で注目を集めました。私はそのとき、「ついに日本でも貧困問題が始まったのだな」と思ったことを覚えています。もう、途上国だけの話題ではないのだなと思いました。



そのような状況のなか、2009年、政府は初めて公式な発表として、「子どもの貧困率が15.7%で、7人に1人が貧困状態にある」と伝えました。2013年に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」もできました。この年を契機に、日本は3年に一度貧困率を発表しています。この「7人に1人」という割合は、発表されたときにとっても驚きました。子ども支援の関係者はみんな動揺していました。思っていたよりも多すぎると思いました。学校で言えば、30人学級なら4、5人が貧困状態に該当するわけです。「日本のどこにそんな子どもたちがいるのか」「これは放っておけない」と思いました。そこで私は、職場であるNGOに「子どもの貧困問題について活動させてほしい」と申し出て、この問題の担当となりました。しかし、はじめはこの問題についてわからないことが多く、まずは状況を把握するために、2011年まで子どもたちの実態調査をしました。子どもたち100人に、一人ひとり話を聞くというものです。子どもたちはいろいろ話をしてくれました。

小学校3年生の男の子が、分度器について「うちはお金が足りないので買えない」と話していました。最近では100円ショップに売っていますが、それが買えないということでした。しかし子どもが一番嫌がっていたのは、実は分度器が買えないことではなかったのです。「うちにお金がないのは仕方がないねん。でも、先生にうちが貧乏とは言えない。先生に、毎回『なんで分度器をもってこないのですか。次はもってきなさい』と、みんなの前で言われるのが嫌なんや」と話してくれました。

6年生の女の子で、シングルマザーのもとにいる子どもでした。お母さんが夜になっても帰ってきません。仕事なのかどうかもわからず、晩ごはんにありつけないこともありました。ときどき家に男の人が来て、「外行け」って言われるのだそうです。「けど、行くところないやん。公園とか夜こわいし。ああいうとき、ほんま行くところないやん…」と、調査のほずが相談を受けたこともありました。子どもたちが直面している問題を知らされた調査でした。

2011年2月に調査は終わり、レポートにまとめて厚生労働省に届けました。貧困は、政府発表の調査による数値結果のとおり、子どもたちに確実に忍び寄ってきていることがわかりました。「ぜひ対策を講じてほしい」と訴えました。

その年の3月に、東日本で震災がありました。それまでのNGOの国内事業は全てストップし、私たち職員は全員が東北の復興支援に派遣され、私も3月15日に現地に入りました。そこでは、遺体が流れていたり、家やビルがプカプカと浮いている惨状も目の当たりにしましたが、被害の甚大さに圧倒され、はじめは何もできませんでした。私は阪神大震災も経験していますが、東北の震災はそれとはまた違った、ひどい被害が広域にわたる災害でした。この状況をどうやって人の力で戻すことができるのか。甚大な被害の前にただただ立ち尽くすという状況でした。でも、ただ立ち尽くしていても仕方がないので、まずは避難所の体育館を一軒一軒回り、一人ひとりの子どもたちに、「いま、何か困っていませんか」「どういったことがあると助かりますか」と、ニーズ調査をすることから始めました。そうしたら、子どもたちは「遊びたい!」「遊び場がほしい!」という回答をしたので

す。これには驚くのと同時に、少し救われた思いがしました。おもちゃやお菓子を欲しが
るのかなと思っていましたが、ほとんどの子どもたちが「遊びたい」と言ったのです。保
育園もずっとお休みでしたし、それまであたりまえにあった学校生活や園生活は当然でき
ず、体育館は避難所となっていました。そして、運動場は瓦礫の山です。そんな状況で、
子どもたちは遊ぶところがなかったんですね。でも、そこはやはり子どもです。お腹が空
いていてもよく走りますし、よく遊ぶんですね。おとなは震災に打ちひしがれています。
そんな中をキャッキヤと走り回るもんだから、「こんな時になんや！隅で座っとけ！！」な
どと怒られていました。そこに私が行って「何したい？」と聞くと、子どもたちは「遊び
たい」と小さな声で答えてくれるのでした。私は、あの子どもたちの姿を忘れることがで
きません。子どもたちは“遊びたい”のです。子どもたちにとっては遊ぶことが学ぶこと、
遊ぶことが生きることの中核なのだとすることを、本当に実感しました。ですから CPAO の
活動も、まずは“ご飯”なんです。そして、遊ぶ。思いっきり食べて、思いっきり遊ぶ。遊
んだら、どうするか。子どもたちは“こてっ”と寝るだけですよね。そういった基本的な
生活があって、次によろやく「自分の好きなこと」や「得意なこと」を伸ばしていこうと
いう状況になるのだと思います。

～孤立した、ひとりのシングルマザー～

私には12歳になる息子がいます。そして実は、私も小学校6年生の子どもをもつシン
グルマザーです。

私は、息子が3歳のときにシングルマザーになりました。国際結婚だったのですが、夫本
人は差別に遭ったり仕事がみつからなかったりといろいろあるなかで、日本での生活がう
まくいかなくなり祖国へ帰ってしまったのです。ですから息子が3歳で、私がシングルマ
ザーになったころから、ずっと私は子どもと仕事を天秤にかけて生きてきました。今の日
本ではほとんどの方がワーキングマザーなのではないでしょうか。私は、シングルマザー
になってはじめて、家計も一人で担わなければならないことに気がつきました。夫がいた
ときは多少なりとも安心できたものが、一人だと仕事へのプレッシャーが全然違いました。
「私に何かあったらどうなるのだろう」と、途端にストレスを感じるようにもなりました。
仕事もフルタイムで働いていましたから、朝8時から保育園に子どもを預けました。仕事
は10時からだったので、本当はもっと遅い時間に預けても間に合ったのですが、通勤に
時間がかかるのと、定時にはさっと帰るために、同僚よりも早くに出勤していました。退
勤は午後6時です。それで保育園の迎えは7時。朝8時から夜7時まで、息子はびっちり
と保育園に預けていました。朝の準備も「早く！早く！」の連続です。それでダッシュで
保育園に預けて、迎えもダッシュで保育園に駆け込み
ました。子どもはまだゆったりまったりしているところを、「早く！早く帰るよ！」と。そしてまたダッシュ
でスーパーに買い物に行き、やっと自宅に帰ってきたら、一番にすることはおむつ等の洗濯物です。そして
ご飯をさっと簡単に作り、子どももテレビをゆっくり
見たいのに、パチッと切られて晩の食卓です。急いで
仕事から帰ってきても、買い物などして7時半です。



でも8時半か9時には子どもを寝かしつけたいので、帰宅後の1時間半はものすごくあわただしいわけです。時間がないなかご飯を作っているのに、子どもに「今日のご飯いらん！」とか言われるとブチっと切れそうになることもありました。お風呂では子どもは遊びたいですね。でも私はすぐに出したいから、「お風呂で遊ぶのは週末だけ！」と言ったりしました。それで、早く寝かしつけたいから部屋の電気も早々に消して、それでもちょっとは子どもの話を聞こうとはするものの、受け答えもろくにせず、“心ここにあらず”です。では私の心はどこにいつているのかというと、「洗濯物を干さない」と「洗い物もシンクにそのままだな…」「保育園の連絡帳を見て、明日の用意をしておかなければ…」という具合です。さらに、私は定時で職場を退勤しています。でも同僚は、その後も残ってずっと仕事をしていますから、「(退勤後の)メールチェックもしておきたいな…」など。そんなことが気になっていると、子どもが目の前にいても“うわの空”だったのです。そうすると、子どもは敏感に感じ取るんですね。「お母さん！お母さん！」ってなかなか寝ついてくれません。30分たっても全然寝ないわけです。はじめは優しく子どもの背中をトントンしていたはずが、いつのまにかドーンドーンと力が入って…。「お母さん痛い！」の声でハッと我に返るわけです。私は当時、「子ども支援」という名目で保護者の方に講習をすることもあったのですが、「なんだかもう自分自身が虐待と紙一重やん！」と思えてきて、とてもつらかったです。



つまり、私も孤立した、ひとりのシングルマザーだったのです。

そんなところに震災復興支援の仕事が入ってきたので、さらに生活は過酷になりました。はじめは私の親が子どもを預かってくれたのですが、そのうちそれも難しくなり、その年の後半は息子を被災地に連れて行きました。子どももはじめは「新幹線に乗れる」と喜んでいましたが、そのうちだんだんそうはいかなくなっていきました。どうにかこうにかその年は乗り切ったのですが、次の年、息子は小学校への入学を控えていました。「もうこんな生活はできないな、どうしようかな、仕事を辞めるしかないのかな…」と考えるうちに、私は「またか」と思いました。



いつも私は子どもか仕事かを選ばなければならない状況になる。どうして両方させてもらえないのだろうか。私は好きで仕事をしている。そして、好きで子どもも産んだのに、両方はさせてもらえない。両方やるには、どうしたらいいのか…

真剣に考えました。そして、組織にいて難しいのであれば自分でやるかということで、CPAOを立ち上げました。これが、私の活動の背景です。



でも、今となっては、活動してよかったなと思っています。なぜなら、私たち親子が一番救われているからです。今、孤立なんかちっともしていません。今日も「いいよ、三重からゆっくり帰ってきて。もう夏休みやしな、子どもはご飯食べさせとくわ」と言ってく

れる仲間が、何人もいてくれるようになったんです。息子にとっては、親戚のようなおっちゃんやおばちゃんや、いとこみたいな子たちの存在ができたんです。あのまま、孤立したままでがんばっていたら、今頃私たち親子はどうなっていたのだろうと思います。私たちは孤立せずに済みました。でも、目の前の子どもたちに対してはどうかといいますと、何もできていないというのが現状なんです。週に3日や4日ご飯を食べさせていると、「すごいですね」と言ってくれる方もみえるのですが、そうではないのです。子どもたちは毎日お腹が空いているんです。「週のうち、4日しかできていない」と私は思います。「なんでCPAOは週4日しか開けてくれへんの？」と、先日、5歳の子に言われたばかりです。

～「個居人(こいびと)づくり」～

私がこのように丁寧にプロフィールを話すのには理由があります。私にはいろんな人の支えがあって、なんとか孤立しなかったから、今があるということを伝えたいからです。今も私のもとには、全国からSNSを介して、救いや相談を求める声が届きます。本当に困窮している人たちは、みんな孤立しているのです。どこにも相談する人がいなかったり、愚痴をこぼす相手さえいなかったりする人たちから、悲鳴に似た声が毎日のように届きます。でも、私も“ひとり”だったら無理でした。そんな状況で子どもの問題まで抱えたら、無理だろうと思います。自分でなんとかしてくださいという、「自己責任」という冷酷な言葉があります。でも、そればかり求めても無理だろうと思います。みんな人とのかかわりの中で生きています。しかし、「どうしてそんなに孤立してしまうのか」というほど孤立している人もいます。ですから私は、しんどい状況におかれている子どもたちを、居場所となるような人たちにつなげたいと考えています。子どもの思いに耳を傾け、一緒に居てくれる存在です。最近では「個居人(こいびと)づくり」なんて呼んでいます。こういった人の存在があれば、なんとか私のように生きていけるのではないかと思うのです。どんな方法でもいいから、とにかく子どもたちにたくさん「個居人」をつくっていきたくて活動しています。



4. 大阪子どもの貧困アクショングループ シーバオCPAOを立ち上げた頃

大阪では、象徴的な母子の事件が2つおこりました。

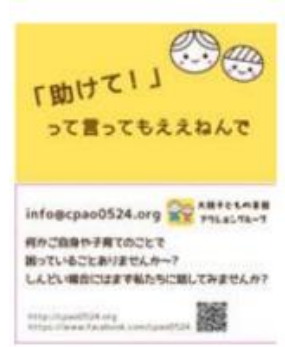
一つは2010年の7月に起こりました。西区にある雑居ビルの一室で、3歳と1歳の子どもが餓死した事件です。母親は当時22歳。二人の子どもを一人で育てていました。風俗店で働いており、お店の寮で親子は暮らしていました。この母親は50日間子どもたちに食べ物や飲み物を与えず、いわば見殺しにしてしまったという事件でした。

もう一つは、2013年の5月に発覚しました。北区の商店街の一室で、28歳と3歳の母子が遺体で発見されました。死後3カ月間見つからず、子どもの頭は一部白骨化していたそうです。繁華街の真ん中にもかかわらず、3カ月もの間見つけられなかったのです。遺書のようなメモがありました。「もっとおいしい食事をさせてあげたかった」。

この事件のあった翌日に、私は大阪子どもの貧困アクショングループを仲間と共に立ち上げました。「もっと早くに行動を始められていたら」「このお母さんたちが私たちを頼ってくれていたら」と、やむにやまれぬ思いで活動を始めました。

はじめにやった活動は『助けて!』って言うてもええねんで」という名刺サイズのカードを作って配りまくるということでした。1000枚以上を必死で配って、2, 3人が声をあげてくれました。こういった活動を何度も地道に続けていました。

大阪で起こった2つの事件の親子と私には、どんなことが共通していたのかと考えると、「孤立した子育てをしていた」ということです。



5. 垣根を越えた連携を

新しい子どもがCPAOにつながってくれたら、必ず保護者と面談をします。いわゆるニーズ調査として、「いま何に困っているのか」、「どういったサポートを求めているのか」といったことを丁寧に聞き取ります。子どもたちにも定期的に聞いています。そうすると、いろいろなことを話してくれます。はじめのうちは「そんなん言わへんし」と言っていた子ども、3年も4年も一緒にいるうちにだんだん慣れてきます。そのうち、ここぞとばかりに、小さな胸にため込んでいた思いを話してくれるんです。そしてそれが、次の行動につながる可能性があります。

家のごみ屋敷のようになっていて、お風呂場もごみでいっぱいなのでお風呂に入れていない子でした。友だちは、「臭い」と言ってその子と遊ばないという状況でした。その子にとっては、家がずっとごみのにおいで臭いですから、「自分は臭い」という認識はありません。その子は、友だちから「遊びたくない」と言われて泣いていたんです。それで、この子のために、私たちの活動場所にシャワーブースを設置しました。そして、ご飯を食べる前に入るよう促し、結果週に2回も3回もシャワーを浴びるようになりました。そうすると、いじめられることが減ったそうです。

私たちは、ずっとニーズを聞きながら、事業として具体的なことをしています。

一方で、保育士のみなさんのことを「うらやましい」と思うこともあります。私たちのところには、何か働きかけをしないと子どもたちは来てはくれません。社会福祉制度外の団体で、完全自主事業ですから、何かの措置としてCPAOが紹介され、それで来てもらえるようなことはありません。それとは違って、保育園では朝と夕の1日2回子どもの親に会えます。なんらかの状況をキャッチできたら、ぜひそれを抱え込まず、いろいろな機関とも連携しながらサポートしていただきたいと思うのです。そして、私たちのような民間の機関も、ぜひ活用してほしいのです。

私たちは、支援の必要な子どもを早く見つけようと、とにかく街中で案内を配ります。被害の予防という意味からも、少しでも子どもが小さいうちに見つけてつながらなければならないと思っているからです。そしてつながった子どもたちは、必要に応じて早い段階から関係諸機関につながります。行政もそうですし、弁護士や警察、不動産や医療機関、社協や民間施設など、ありとあらゆるところと連携をもちます。一人の子どもをなんとかして救うために、みなさんに“枠”を越えてくださいと話しています。



6. 「自己責任」では片づけられない

いま、最終のライフラインは携帯電話だと思っています。これが止められたら、もう致命的です。PTA や学校からの連絡も、最近は携帯電話を使うことが多いですね。また、派遣会社に登録して仕事に就いている人にとっても、連絡はすべて携帯電話を介してです。コンビニの無料 Wi-Fi から SNS の無料通話をつかって連絡をくれるお母さんからは、「30分後に電話が切れたら、もう私は終わりです…」とか、「死のうと思っています…」などと連絡をもらったこともあります。こういった SOS を受けたら、どんな仕事があっても、絶対に優先して緊急対応する必要があります。もっと早くに SOS を出してほしかったと思う案件もありました。どうしてそんなになるまで助けを求められなかったのだろうと思います。

お母さんたちのなかには、「自己責任」という感覚が身に染みついてしまっている方が少なくありません。「私がアホやからこんなことになってるんや。人様にすぐにお世話になることはできない」。そんなふうには、3年も4年もぐっと耐えて過ごしているんです。そんなことになるまでには、お母さんたちにもいろいろな体験があり、つらい思いもたくさんしたことでしょう。きっと冷酷な態度も受けてきたのでしょう。だから、お母さんがそう思うのも無理はないのです。

しかし、そこに一緒にいる子どもたちはどうでしょう。子どもにとっての3年間や4年間は、おとなとは全く時間の流れ方が違うことでしょう。成長・発達の真ただ中にある時期には、「こんな経験をさせたい」「あんなことができるようにさせたい」と思うものです。例えば4歳や5歳になっても言葉を発しないとか、0歳から1歳の間で栄養をまったく摂ってこなかったという子どもたちがいます。その影響は、将来にわたってどれだけ負の影響をこの子たちに与えるのだろうと考えたりもします。それでもお母さんたちは、なかなか SOS を出してはくれないです。

でも、そんな親を責めていても仕方がないですよね。それで、親を介さずとも直接子どもたちに出会えることを考えた結果、週に3回、4回とご飯を作って子どもたちに食べさせるという活動につながったわけです。すると、通ってくる子どもたちのことを、よく知ることができるようになりました。週に何日間も、放課後から夜までずっと一緒にいるわけですから、「怒っているな」とか「元気がないな」とか、顔色のちょっとした変化も全てわかります。来なくなったら、すぐに家まで迎えに行きます。たとえ家になくても、友だちにも聞きながら近所を捜しまわり、すぐに見つけます。そして、「学校行ってるか？」なんて声をかけながら話していくんです。



7. 居場所がない人の居場所

社会では、「DV じゃないとだめだ」「母子家庭じゃないとだめ」「生活保護世帯じゃないと支援できない」など、いろいろなことで行政や民間の支援の枠からもれ落ちていく人たちがいます。生活保護を受給していると収入があるとみなされ、お金や物が借りられないことも起こっています。いろいろなところでもれ落ちて、支援と支援の隙間に落とされた人

からたくさん SOS がきます。でも、本当にしんどい状況にある人ほど、簡単によそとつながるのを嫌がったりします。「生活保護にかかるぐらいなら死んだ方がましや！」という人に、これまでもたくさん出会ってきました。また、ひどい経験をしてきている子どもほど、人や社会を信じてはいません。そんな子どもを見つけ、支援につなげるのが社会福祉の基礎ですが、まずは、そのカチカチになっている心をほぐしていかなければならないのです。

「人や社会を信じる力」を取り戻すということをしなければ、やはりつながらないと思います。ですから、お母さん自身が人や社会を信じていなければ信じていないほど、子どもの場合と同じで“試し行為”をしてきます。何回待ち合わせをしても来てくれなかったりするんですね。でも、それだけつらい思いをしたんだろうと、私は思います。

ほぐしていくには時間も必要です。子どもだけは出してくれるけど、「私は絶対に行かないから」と言っていた親がいました。そのお母さんには、1年も2年も、特に何も言わずに子どもに、お母さんの分のご飯も持って帰らせていました。そのうちに来てくれるようになり、目も合わさず「いつもありがとう」と言って、さっと帰っていくようになりました。ちょっとはほぐれたのかなって思いました。そして、やはり急いではいけないなと思いました。それだけ心が傷ついているのだなと思います。だから、まずは「ほぐす」ことが大事だなと思って取り組んでいます。

受け入れてくれる人とはお茶を飲んだりもします。まずは友だちになることです。私を受け入れられないときは、他のスタッフを紹介します。誰かを信じられることから始まるからです。そして信じてくれたら、私たちの居場所に来てもらいます。「信じられる人は、もっといるんだ」とわかってもらうためです。

うちは子ども食堂のように、子どもたちがご飯を食べる場ではありますが、同時にお母さんたちの、人や社会を信じる力を取り戻す場でもあります。ですから、「だれでも来てください」という看板のあげ方は一切していません。子ども食堂によっては「だれでもどうぞ」というところもありますが、うちはメンバー制です。人や社会を信じられないお母さんは、誰がいるのかわからない場所には来てくれないからです。みんなが顔見知りの中に呼びます。誰でも来られる場からはじかれてしまうのは、一番弱い立場の人たちです。“みんなが集まる”ところに行けない人が来られる場所にしたいと思っています。居場所がない人の居場所づくりをめざしています。



8. 子どもの姿に反映されるもの

子どもたちの様子で気になることは、暴力的なところですが、ちょっと肩がぶつかっただけで「殺すぞ！」と暴れまわります。どうしてでしょうか。そんな子は、ゲームや遊びをしていても、どんな汚い手を使ってでも絶対に勝ちたがります。負けることが絶対に認められないのです。途中で負けそうになるとぐちゃぐちゃにするのは当たり前。ルールも勝手に変えて、とにかく無茶苦茶します。そんなことをして、何が楽しいのかと思うわけですが、子どもたちが勝手に暴力的になっているのでしょうか。そんなわけはありません。

2歳の子がやっと話し始めたのに、「死ね」とか言ってしまう姿を見ていると、そんな現状を認めたくない気持ちにもなります。なんでこんなに暴力的なのか。それは、おとな社会が暴力的だからです。自分も胸に手を当てて考えなければならないという意識を、子ども支援者は常にもっていないといけません。同僚や親御さんには言えないようなことを、子どもには強く言ってしまうという自分はいませんか。いろんな場面で、おとなと子どものパワーバランスの中で、力任せに言い放ってしまうことはないでしょうか。これが、「強い者は弱い者に強く言ってもいいんだ」という意識を生み、大きい子が小さい子にきつく言うてしまうという状況を生み出しているのではないかと考える必要があります。

あとは、ささやかなことかもしれませんが、「暴力的じゃないほうが楽しいやろ？」と話しかけ続けることです。「みんなで遊んだら、勝ったり負けたりすることはあるよ。そのなかで楽しむということはどうしてできないの？一緒に楽しもうよ」と。シンプルですが、これをずっと言い続けるのです。はかなくて気持ち折れそうになることもあります。子どもたちの様子を見ていると、毎日のように一緒に過ごす私たちスタッフには暴言を吐かなくなっていくという変容も見受けられます。ですが、新しく来てくれたボランティアスタッフには、言いたい放題に言うてしまう姿もあるんです。そんな姿を見ていると、この子も将来DVや虐待に走ってしまうのではないかと心配になります。これを止めるためには、はかないですけども、一人ひとりの目の前の子どもたちに、暴力的ではない方法を使って私たちおとなが接することです。この繰り返ししかないと考えています。

また、子どもたちはよく「自分だけ」とか「一人だけ」を求めてきます。「私だけの相手をして」というわけです。ご飯の前には、スタッフの取り合いですよ。「ご飯食べたら、ぼくと本読んでや」「いや、わたしと遊んでよ！」とかね。その“取り合い”で子どもどうしのケンカが始まります。見ていると、胸が痛くなります。“物”だったら代用品を探してなんとかかなりますよね。でも、子どもたちが求めているのは“愛情”なんです。自分だけを見てくれる人の存在がほしいのです。そして、本当にほしいのは、親からの愛情です。これをどうやったら他人が埋められるのでしょうか。ずっと子どもたちをみながら、子どもたちが欲しいものを埋められなくて、申し訳ないと思っています。「他人でもいいか？」そんな気持ちで寄り添っています。

「お母ちゃんがいい！」「お母ちゃんに抱っこしてほしい！」って、子どもたちは言いますよね。「お母ちゃんいろんな理由でできへんもん。代わりにおばちゃんがぎゅうってしたろ」って。子どもたちの心の隙間は、なかなか埋まりません。でも、生き延びて行ってほしいと思います。



9. 子どもは社会で育てる

私たちの目的は、「子どもを社会で育てること」です。そのための制度づくりと、人々の熱意をどう喚起していくかということに、いろいろと試しながら取り組んでいます。「子ども食堂」や「学習支援」などのように、人々の熱意が基盤となって支えている取組がたくさんあるのではないかと思います。国は責任を果たして、諸外国並みに子どもの育ちに公費を投入するべきです。でも、やはり最後は、“人は人が支えていく”ということだと思

ます。目の前の現場で、私たちもなんとか一人の子どもを必死に支えようと取組を重ねています。みなさんが身をおいている保育現場は、日常的に“気になる親子”にかかわることのできる貴重な職域です。現場の中で、今日のお話を何か一つでもご参考にさせていただけたら幸いです。

《参加者の感想から》

- 子どもの貧困について、新聞などでよく目にします。しかし、自分の周りでは子どもの貧困について見たり聞いたり、また実際にかかわったりする事はありません。でも今回お話を聞き、こんなにしんどい思いをしている親や子どもがいることにショックを受けました。まずは「知る」ことが大切だと思い、これからは現場でアンテナをもっと張りたいたと思いました。
- 言葉づかいが荒い子、すぐに手を出してしまう子がいます。お迎えに来ると母親も、いつも疲れた顔をしています。家庭訪問をすると、部屋の環境で気になる場所が見えてくることがあります。子どもをはじめ保護者の家庭での背景を見つめ、支援が必要であるとあらためて思いました。
- 子どもたちが求めているのはモノではない、人のあたたかさであるということがとても心に残りました。人を信じて甘えることのできる子どもになるように、子どもたちとかかわっていきたくと思いました。
- しんどい状況に置かれている親の心の叫びに、いち早く保育の現場で気づいていけるよう、日々保護者とのコミュニケーションをとっていこうと思いました。親と会えることを強みに、サポートし、保育をしていきたいです。
- 教育集会所に勤務しています。保育現場ではありませんが、しんどい状況にある保護者からのご意見等、私の周りにも気になることが多々ありました。それはSOSの声なのだ、最近感じるようになりました。今日のお話は、共感することが多くたいへん参考になりました。
- 自分は以前、生活保護ケースワーカーをしていました。そのときは、現場での対応に必死で、SOSの声を自ら発信しづらい世帯に対してのアプローチにとっても苦労したことを覚えています。子どもの孤立、世帯の孤立を防ぐためにも、行政以外からのアウトリーチの重要性をとっても感じました。

